

本書「はしがき」の冒頭には、「教育の根本は児童にやどる無限の可能性を信じ、発見し、それを賞揚し、激励し、自信を高め、勉学に興味をもたしめることにあるのである。子供の伸びる力は「生命」の伸びる力である。生命は解放されてはじめてスクスク伸びるのである」と述べられている。

親や教師など子供の教育に携わる者が、本当にこの言葉を信じ実行するならば、どれほどすこい結果がもたらされるのであろうか。本書にもその体験の一端が紹介されている。

子供が生長するということは子供に宿る生命それ自身が伸びることであり、決して他から何かが子供に植え付けられることではない。子供に宿る生命は無限の可能性に満ち満ちており、親や教師はそのことを徹底的に信じ、それを引き出すために「激励し、自信を高め、勉学に興味をもたしめる」ように導けば、子供は驚くべき結果をもたらすということである。そして、これこそが教育だということである。

谷口雅春先生の「生命の教育」は「人間神の子」の真理から発しており、その神の子の本性を引き出すために、「褒めること」が称揚されている。しかし、だからと言って「叱ること」を否定してはいない。本書の中でも「生長の家は鉄鎚の教育法」だとして、次のように述べられている。

「かつて私は、数カ月の慢性胃腸病の児童を「お腹が痛い」とときは天井から吊り下げて棒で擲んなさい。このお子さんは病気ではないのに同情を求めて、潜在意識が病気を仮作しているのですから、同情を求めたら却って不結果になるということを知ったら治るのです」と、その子供の目の前で叱責したために、その日からその児童の慢性胃腸

病が治った実例をお話したことがあります」（二二―二三頁）

「褒めること」とは「おだてて甘やかすこと」ではない。「叱るしかること」とは「追い詰め虐待あつかすること」ではない。「褒めること」も「叱るしかること」も、ともにその子供に眠る「神の子の神性」を揺り動かし引つ張り出すことである。だからこそ、あるときは「褒め」、あるときは「叱る」。谷口雅春先生が説かれる「褒める教育」と「鉄錘てつづの教育」とは決して矛盾しない。すべては「子供の神性しんせい」を開顕あひげんすることを目的としているからである。

また、谷口雅春先生は、「生命の火花に点火する教育」と言っておられる。

谷口雅春先生が小学校二年生の時、算数が三十七点であった。これを見た養父が火の点いたように叱責しつせきした。その叱責が谷口雅春先生の「自己内在の力」に火を点けた。この「内部の火」を点ずることが教育であると、谷口雅春先生は言われるのである。

「教育の大綱たいこうはこの「自己内在の生命に火を点ける」ということで尽きていると思うのであります。易しい学科を面白いと思つて熱心にやっているうちに、「自分は出来る」

という自信を得て、ついに難しい学科も出来るようになったというのも、自己内在の生命に火が点いたのであります」（一八頁）

「しかし、教育にはもっと深い根本的な問題がある」として、谷口雅春先生は次のように述べられている。

「自己内在の生命に点火したことを自信を得るという。私が何の教育学の素養もないにもかかわらず「あなたは『神の子』ですから、きっと成績がよくなるのですよ」と二言いつてその児童の頭を愛撫あいふしてあげた結果、たちまちその児童の成績が改善したという例が往々にしてあるのは、私が一つ一つの学科の灸所あしどころを教えたからではなく、全体としてその児童の本性ほんせいにあるところの「神の子」に点火したからであります」（一八―一九頁）

「『生長の家』式にいえば、『実相』に火が点くということでありませう。埋没まいぼくされていた『神の子』なる実相に火が点ぜられ、それが表に輝き出でることでありませう。

火が点ぜられれば、その周囲は自然に一切が明るくなるように、自己自身が興味の火焔かえん

となれば、あらゆる学科を興味の光で燦然と照し出すことが出来るのです」(二頁)

また、谷口雅春先生は「常不輕菩薩の教育」とも言っておられる。

「勉強の出来ない、成績の悪い子を、『勉強の出来る、成績の良い子だ』と信頼して思えといつても、そんなことは思えませんといわれる人がたくさんあります。それは思えないのが当り前なのです。それは五官の眼でその子の現象を見ているからです。しかし、五官は『信念の反影』を見るに過ぎませんから、『出来の悪い子だ』と信じている限りは、五官の眼で見ているかぎりは出来が悪いのは当然です。そんな時には五官の目を閉じて合掌し、そうして心を鎮めて相手の実相を観るようにすれば好いのです。

良人の場合も子供の場合でも同じことです。子供の場合には『自家の子供は神の子であつて自由しておいても勉強するのである。人間は勉強が楽しいのであるから、親が心配しなくても勉強するのが当り前であるから勉強する』と、こういう意味の言葉を静かに念ずるのであります」(一四六頁)

「『法華経』に、常不輕菩薩が、どんな人を見てもみんな仏の子であるとしておがんだ

はしがき

ということが書いてあります。この美点を見る教育法はあの行持(編註・常不輕菩薩の行い)を子供に応用したのであります。この行持を子供に応用すれば子供がよくなり、(中略)家庭が光明化するのであります」(一四七頁)

「人間は神の子であつて無限の能力を持っている」との大自覚から発して、それが教育に及べば「生命の教育」となって現れる。その意味するところを本書でも十分に味わって頂ければ幸いである。

令和二年三月吉日

谷口雅春著作編纂委員会